

真の時間創出に貢献する医療DX

序 文

群馬大学医学部附属病院 システム統合センター 准教授

鳥飼幸太

医学論文ポータルサイトであるPubmedでは、「アラート疲労」(alert fatigue)に関する論文について、2003年21件であったものが2023年には約8倍の164件に達している。また2024年11月9日よりサンフランシスコで行われた米国医療情報学会においてもシンポジウムとしてalert fatigue/burnoutを含むデジタル疲労が取り上げられている。これは患者に対する医療の質向上を目的とした医療ワークフローにおけるデジタルツールの導入が、医療スタッフの情報労働負担として増加しており、個人の情報操作スキルの向上による対応に限界が来ていることを強く反映しているものと捉えている。筆者は繰り返し「時間創出」という単語を医療DXというスローガンの解釈としているが、医療機関が今後も安定して医療を提供する基盤に貢献する観点では、時間創出は先に述べた「医療の質向上」と本来両立しなければならない特性である。しかしながら、alert fatigueの社会課題化が示すように、この両立が容易でないことを示している。これは、各医療現場におけるワークフローはそれを運用する医療スタッフの討議により形成されていること、方法を定着させ変化させないことで、スタッフのローテーションやピンチヒッター運用が生じる中で医療安全を保ち易くなるという性質があること、また建築における増改築を繰り返すようにワークフローを成長させる場合、合理化が損なわれた場面をスタッフの作業増加(多重入力など)により一過性に吸収し、その運用が長期間見直されない場合、医療の高度化に伴ってワークフローが複雑化した後ではさらに見直しの機会を持てなくなること等のように、医療サービス提供の目的に対する本質的な要因を内包しているためと考えられる。本特集は、診療科、部門、病棟、横断部門におけるワークフローについて、これを可視化してスタッフと討議し、適切なデジタルツールの利用によるワークフローの効率化に到達するための一助となることを目的とし、医療DX/医療安全第一線で活躍される先生方に執筆をお願いした。大変多忙な先生方であることは十分承知しており、かえって依頼がalert fatigueの積み増しになるのではないかと感じているが、公益のためという意義に賛意をいただき、貴重な知見ならびに向かうべき方向性をご披露いただけたことに対し、敬意を込めて心から感謝申し上げる。